

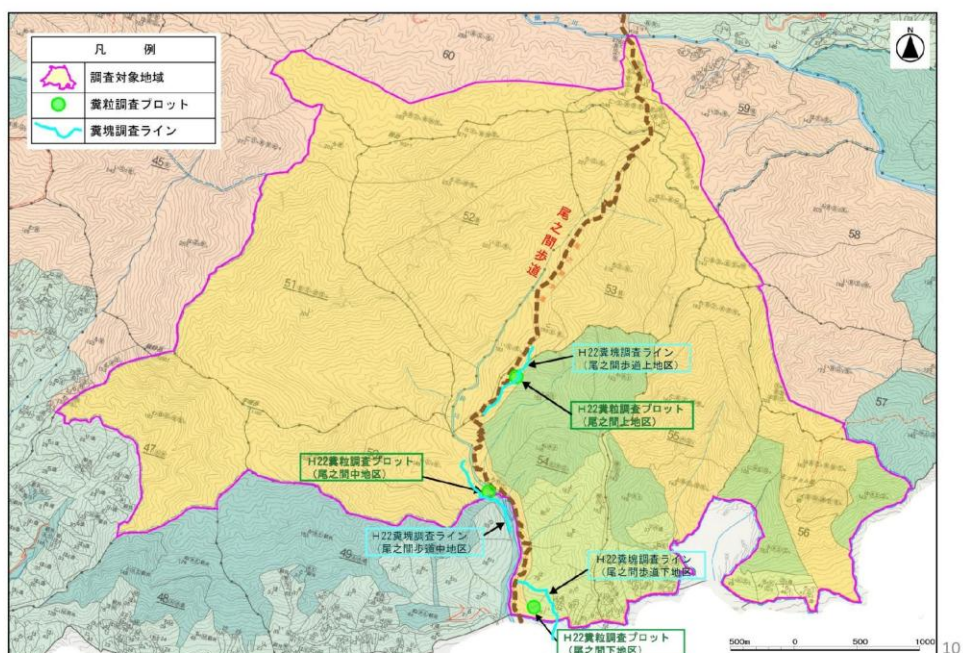
現地視察 資料 3－2

南部地域における ヤクシカ関連の調査結果と現状等

南部地域におけるヤクシカ生息密度、植生への影響、捕獲の現状

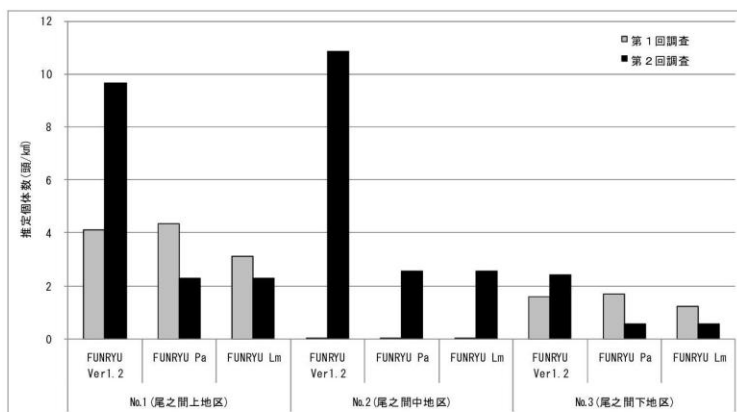
項目	ヤクシカ生息密度、植生への影響、捕獲の現状
植生・絶滅危惧種への影響	- 湯泊、尾之間のブナ科樹種の萌芽枝の被害率はそれぞれ49%、47%となっているが、西部ほどの被害ではない。(H22共存事業) - 烏帽子岳、七五岳山頂付近の植生垂直分布調査によると、下層植生には、他の地域では少なくなったイヌビワ、ボチョウジ、ヤクシマアジサイ、アオツリバナ等の低木や、ヤクシマシュスラン、ダルマエビネ等の草本が残されている(垂直分布調査)。 - 尾之間歩道におけるヤクシカ被害ライン調査によると萌芽、低木、草本への被害を受けた種数は計73種と多いが、もともと生育する植物種が多く、また被害の程度は西部地域より軽度であり、萌芽全てが摂食されたり、樹皮剥ぎ見られたり等の目立つ被害が少なかった。ただし、里山部に近い地域では、被害の程度がひどい傾向が見られた。(共存事業)。
ヤクシカの生息密度の現状	低密度である。 千尋滝 (5.9頭/ k m²)、尾之間歩道(2.3頭/ k m²)
平成22年度の捕獲実績	遺産地域内での捕獲実績はない。それ以外の捕獲実績は、 【森林管理署】中瀬川林道 (26頭)

南部地区調査箇所



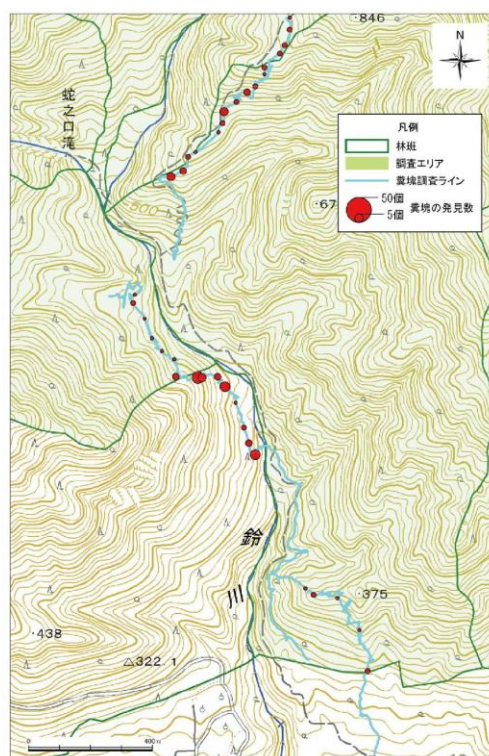
1) 糞粒法調査結果(南部地区)

- ・ 推定密度は、平均3.8頭/km²で、生息密度はかなり低いことが分かる。
- ・ 使用する推定プログラムにより差異が大きい。
- ・ 推定プログラム別にみると、「FUNRYU Ver.1.2」の推定密度が最も多く平均7.6頭/km²、次いで「FUNRYU Pa」及び「FUNRYU Lm」の推定密度は、「FUNRYU Ver.1.2」の50%程度の平均1.8頭/km²となっている。



2) 糞塊調査結果

- 南部地域では、糞塊数が平均 $0.00 \sim 0.03$ 塊/ m^2 と非常に少ない。
- この値は、西部地域の標高の高い2地区の値 0.03 塊/ m^2 と同程度であり、糞粒調査の結果と併せて考えても、生息数はかなり少ないものと推測される。



3) スポットライトカウント調査結果 (南部地区)

- 全区間で 10.6 頭/ km^2 確認された。
- この値は、糞粒調査の結果と比較すると、最も大きな値を推定した「FUNRYU」の推定密度プログラムを使って推測した生息密度よりもさらに大きな値となっているが、調査区間での確認個体数は1頭と少なかったことも考慮する必要がある。

植生垂直分布調査箇所



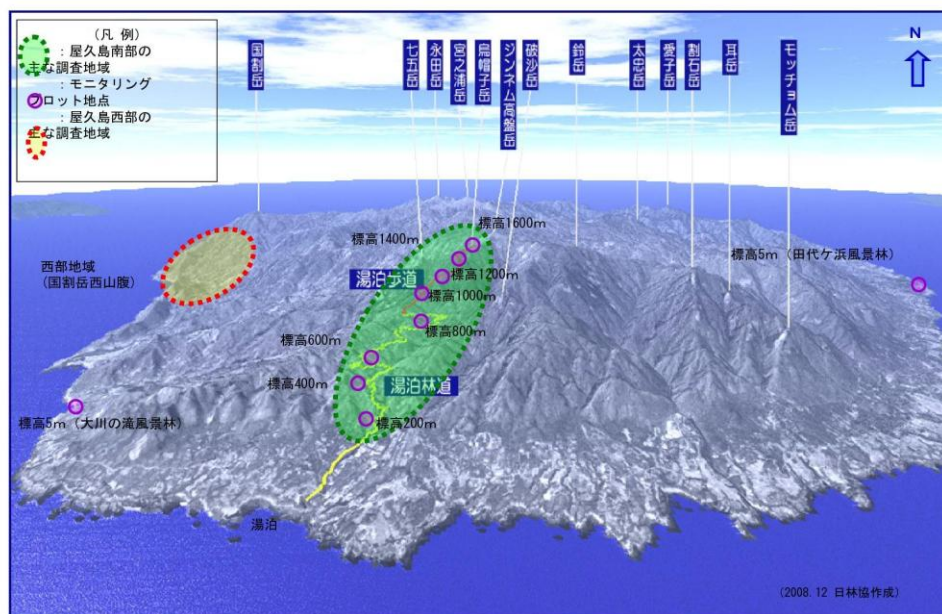
南部地域の植生の特徴

- ・ 標高 200m から標高 1600m（烏帽子岳）。
- ・ 南部は、冬期も暖かく、標高の割りには暖帯林の要素の高い森林が生育する。台風の暴風による被害を受けやすい。
- ・ 高標高の七五岳、烏帽子岳山頂付近が遺産地域

植生垂直分布調査結果（ヤクシカ被害）－10 年間の経年変化－

- ・ 他地域と比較し希少種を含めた草本層の生育数が多く、ヤクシカの採食影響をそれほど受けていない。
- ・ 下層植生には、他の地域では少なくなったイヌビワ、ボチョウジ、ヤクシマアジサイ等の低木や、ヤクシマシュスラン、ダルマエビネ等の草本が残されている。

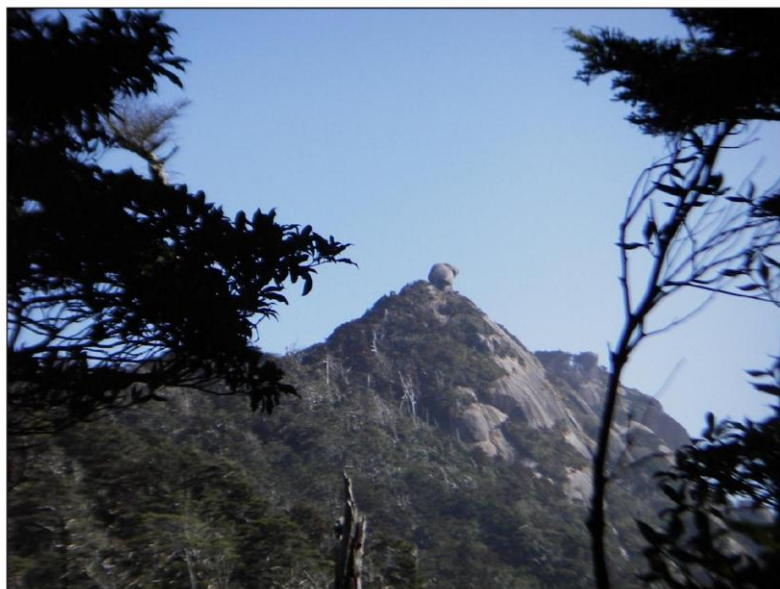
南部の植生垂直分布調査箇所



南部(七五岳と烏帽子岳の写真)



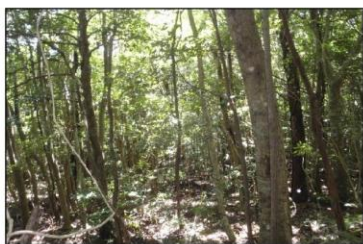
南部(烏帽子岳山頂の写真)



10年間の変動(南部)

- 標高1,200m以上のツガに、台風による風倒被害が見られる。
- 低標高の照葉樹優占林における低木層や草本層へのヤクシカ採食が少し見られるが、希少植物種はまだ残されている。
- 低標高の照葉樹優占林における高木・亜高木層の成長の良さが目立つ。
- 照葉樹優占林における低木層の被圧枯死木が増えている。

南部地域(尾之間地区)における 下層植生への被害状況



尾之間下地区



尾之間上地区



尾之間中地区



尾之間下地区シカによる樹皮剥ぎ

7

南部地域(湯泊林道)における 萌芽枝への被害状況



スダジイの萌芽も多く見られるが、半数程度のスダジイ萌芽へ、ヤクシカによる食害が見られる。